慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「美学特殊C」: 21世紀的生（活）の「美学」を求めて: 「大学」と「世界」のエナクティブな産出に向けてのささやかな試み
Sub Title	Recherches spéciales en esthétique （C）: pour une nouvelle esthétique" des modes de vie au XXIe siècle
Author	熊倉, 敬聡(Kumakura, Takaaki)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2002
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 No.35 (2002. 9) ,p.144- 159
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20020930-0144

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「美学特殊C」：21世紀的生（活）の「美学」を求めて
――「大学」と「世界」のエナクティブな産出に向けてのささやかな試み――

熊倉敬聡

1．大学の知の危機

今や、大学の知――少なくとも日本のそれ――は、危機的状況にあると言われる。私も、現場に関わっていて、常日頃それを痛感している。いや、少なくとも20年前の学生時代にすでに、その兆候は濃密に現れていた。大学はすでに知の「砂漠」のごときところであった。はたして、教える側にその自覚がどれだけあったのだろうか。自覚すらほとんどなかったがゆえに、危機は癌細胞のようにいたるところに転移し、今や末期的な状況を迎えているのではないだろうか。ようやく（！）、ここ数年「改革」が真剣に叫ばれている。私も、学内外で議論の末席を汚してきた。しかし、その渦中にあっていつももどかしい思いがしたのは、その知の危機の本源が議論されないままに、制度論や技術論や理想論に終始してしまうことであった。

従来、大学の知は、「世俗」の知を根拠づける最終的な権威として機能した[1)]。しかし、それは、単に学的に厳密かつ最先端であったがゆえだけではない。それは、政治的に中立な装いの裏に、ある超越的な言説の権力関係を内包＝隠蔽していたがためでもあった。われわれが、大学の知の名の下に語るとき、いかに不偏不党を気取ろうと、われわれの言葉の中ではす

でにこの超越的な言説が語っているのであり、その権力関係が自らを行使しているのであった。その「主人のシニフィアン」（ラカン）が、無意識の〈法〉として、大学の知を律し、世俗の知を根拠づけ、一つの統一的な世界観をもたらしていたのだ。（より正確に言うなら、日本ではもともと「主人のシニフィアン」が脆弱であったにもかかわらず、というより脆弱であったがために、「万世一系」の天皇制として擬態化され、あたかも日本の大学でもそれが真に機能しているかのように、すべては演じられてきたのではなかったか。）

ところが、ポストモダニズム、そして情報化の飛躍的発展により、この「大きな」言説（の擬態）はいたるところで浸蝕され、崩落し、無数の「小さな」――「知」ではなく――「情報」の物語へと増殖を遂げた。その無限に増殖する情報の「海」にはもはや古の学の体系化などいっさい無効だ。せいぜい溺れることのないよう、「サーフ」の技を身につけるので精一杯だ。

大学の知は、今、「主人」の言説（の擬態）の廃墟と、デジタルな海を渡る「オタク」[2]たちの数限りない「小さな」物語との間で引き裂かれ、断末魔の叫びを上げている。学生にレポートを書かせてみよ。それはまさに「図書館」と「検索エンジン」との間で寸裂している。

いや、「オタク」とは、翻ってみれば、この情報の海の中で溺れぬための一種の知的・心的防衛機制ではないのか。彼らは、自分たちの「小さな」物語に、ただそれだけに、幽閉、耽溺する。しかし、実は、彼らにとって、その「小さな」物語は「小さく」ないのだ。ひとつの「大きな」世界、宇宙なのだ。この、外から見れば「小さい」ものを「大きな」宇宙と同定＝錯視し、外部の他の物語＝宇宙には徹底的に無関心であることこそ、オタク的世界観の特徴の一つと言える。

大学の知も、今や、（いやもうずいぶん前から）決定的に「オタク」化し

つつあるのでないか。ある局限された分野の情報的差異に、差異の増殖に、執拗にこだわり続け、その「小さな」物語＝宇宙に淫する。そうした「小さな」分野＝物語だけが、いかなる超越的な言説に統べられることなく並列し、限りなく細胞分裂を繰り返す。知の廃墟は、こうして、情報の海原に崩折れ、飲み込まれていく。

確かに、この知の廃墟＝情報の海は、しばらく前から――たとえばイマニュエル・ウォーラーステインも言うように[3]――、一方では（自然科学の方から）「複雑系」的思考により、他方では（人文科学の方から）「カルチュラル・スタディーズ」的批判により、来るべき再編成に向けて胎動しつつあるようにみえる。しかし、その胎動は未だはなはだ微弱なものであり、新たなエピステーメーを励起させるにはまだまだ膨大な時間と労力を要しそうだ。

このような思考の人類史的冒険＝危機の傍らで、オタク的情報のビッグバンに翻弄されながら、われわれの多くが致命的なまでに見失っているもの、それは、知の〈外部〉への大いなる「問い」ではないのか。大いなる「なぜ」の体験ではないのか。未知なるものと遭遇したとき、知はうろたえ、動揺し、懊悩する。試練にかけられる。知は、広大な非知の沈黙を前にして、巨大な「なぜ」と化す。呻吟しながら試行錯誤を繰り返した末、幸運ならば、ある時突然、光明が差す。見える、ではないか。今までまったく見えなかったものが、見えるではないか。と同時に、ふと振り返ると、知の姿も大きく変貌している。

こうした、知と非知の体験の循環、理論と実践との絶えざる相互作用こそ、今の大学に最も欠けているものではないのか。

以下に紹介する「美学特殊Ｃ：21 世紀的生（活）の『美学』を求めて」という授業は、この知と実践の相互作用、大いなる「なぜ」の体験のささやかな試みである。「美学特殊」という科目は、本来、文学部美学美術史学

専攻の専門科目であり、同専攻の２・３・４年生が美学の基本的概念と方法論を学ぶべき場だが、それは私の予想をすら大きく超えて、発動しつつある。その実況報告を、僭越ながらこの場をお借りし、行なってみたい。

２．事のはじまり、そしてプレ･チームの発表

私は、講義要綱に以下のことを書いた。

19世紀・20世紀は、少なくとも「先進国」において、資本主義が生（活）をデザインする主要なロジックを構成していました。それに対し、いわゆる「芸術」は、そのような資本主義のロジックの外部で、感性・知性の美的強度を探求しましたが、それは往々にして社会的な特権者たちのものであり、大衆との溝を深めるばかりでした。（「サブカルチャー」にその溝を埋めるがままにさせました。）

21世紀が始まりつつある今、生（活）のデザイン、「美学」も大きく変わりつつあるのではないでしょうか。どんな生（活）の形・スタイルが、これから「美しい」のか？　そして「幸福」につながるのか？　皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

授業では、以下のようなテーマを扱う予定です。

（脱）芸術、カフェ的なもの、「弱い」主体たち、セルフ・エデュケーション、身体のエロス化、ジェンダー、NPO、ヴォランティア、地域貨幣、複属・複業、持続可能な環境、「小さい」メディア、知と体験の融合、インターキャンパスなど。

授業の形式は、いわゆる講義形式をとらず、皆さんと一緒に試行錯誤しながら「作って」いきたいと思います。ワークショップ、あるいはキャンパス外の体験型プログラムも行なっていきたいと思います。

参加希望者は、初回の授業で、志望動機をお聞きしたいので、是非出席してください。

こうして、約60人が集まった。当初は、授業の性格ゆえ、最大30人と思

っていたが、結局参加希望者たちの熱意に負け、無謀とは思いつつも、そのまま受け入れた。

先述したように、この「美学特殊」は、通常、美学美術史学専攻の学部生が選択履修する科目だが、驚くべきことに、それに該当する学生は全体の半分弱ほどで、残りは文学部の他専攻（社会学専攻、人間科学専攻、西洋史学専攻など）、そして他学部·大学院（経済学部、法学部、商学部、総合政策学部、環境情報学部、政策メディア研究科）、社会人の聴講生などであった。1·2年生用の総合教育科目ならいざ知らず、一専攻の専門科目としては、これは異常な事態である。図らずも、学生たちの自然発生的な動きにより、授業が実質的に学部横断的な広がりをもってしまったことに、ある種の快感を覚えつつも、困惑する。

それらの多様な参加者を前にして、最初の授業で語ったことは、以下のようなことだったと思う。——この授業は、通常の授業のように、教師が一方的に話したり、あるいは文献を輪読したりするような形式をとらない。この授業は、皆さんが自分自身の手で協力し合いながら「作る」授業、一つの「作品」のように作る授業である。教師は、その自発的かつ協働的プロセスを見守り、サポートするにすぎない。だから、教室内に椅子や机をどのように配置するかといったことから、年間のスケジュール、取り扱いたいテーマ、授業評価にいたるまで、どんどんアイデアを出してほしい。ただし、プランをデザインするに当たっては、次のことに留意してほしい。知と体験、理論と実践が絶えず相互作用するように。失敗を恐れないように（たとえ望ましい成果に至らずとも、それまでの試行錯誤の経験がむしろ重要だから）。「美学」という名を冠した講義科目でありながら、従来の「芸術」の制度的枠組みに囚われないように。そして、最後に、通常の授業に比べ、勉強量·行動量が多いかもしれないが、どうかそのすべてを「楽しんで」ほしい。

こうして、いくつかのグループに分かれてのミーティング、そして全体でのディスカッションを経て、とりあえずは、年間に渡り「新たなオルタナティヴ・スペース」「脱資本主義」「21世紀的衣食住の『美学』」「脱芸術／アートレス」「セルフ・エデュケーション」「身体のエロス化」「宗教的なもの」「『小さい』メディア」という八つのテーマについてチームを編成し、理論的な探求とそれを実践に応用するプロジェクトを立ち上げることとなった。しかし、参加者によっては、これらのテーマが何を含意するのか未だ明確でなく、チームに分かれようにも判断がつかないとのことから、とりあえず準備作業としてこれらのテーマに関するプレ・チームのごときものを編成し、それぞれが短期間で調査・討論した上で全体のクラスで発表し、それを参考にして年間を通して活動する本格的なチームを再編成する、という二段構えのチーム編成となった。

結局、二週にわたり、八つのプレ・チームが発表した。驚いたのは、2～3週間という非常に限られた準備時間にもかかわらず、それぞれが中身の濃い、ユニークな発表であったこともさることながら、発表の形式も、チームにより、紙のレジュメ・板書といった「古典的」スタイルから、ジェスチャーつき、パワー・ポイントにいたるまで（しかもPCがプロジェクターにうまく接続できないときなど、ヴィデオカメラでPCの画面を撮り、その映像をプロジェクションするという、まさに「ブリコラージュ」まで登場し、それが妙に新鮮な視覚的効果をあげていた）、まさにあらゆるメディアを駆使したものであった。しかも、一台のヴィデオ・カメラが終始その授業の様子を撮影していた。一度もパワー・ポイントを見たことのないたとえば文学部の一学生と、黒板にチョークで書くという体験を失ってしまったSFCの一学生が協働することにより、互いに新たな刺激を得る、これはまさに授業の学部横断的性格ならではの副産物といえよう。

3．学内外の関連企画

ところで、この授業は、学内的に開かれているだけではない。学外的にも開かれている。

私は、今、学内外で様々な企画に携わっているが、そのいくつかを授業で紹介し、もし今後各チームでそれらの企画に関わるような形でプロジェクトを展開したければ、それも十分可能である旨を告げた。以下、それらの企画を挙げてみよう。

1）ASIAS(Artist's Studio in a School)：私が理事を務めるNPO「芸術家と子どもたち」の主催するプログラム。小学校の学習指導要領の改訂に伴い今年の4月から導入された「総合的な学習の時間」を主に対象として、様々なジャンルで先端的に活躍するアーティストたちと小学校の先生が協働しながらオリジナルなワークショップ型授業を作っていくというもの（http://members.tripod.co.jp/ASIAS/）。

2）東京国際芸術祭(TIF)コミュニケーション・プログラム：今年の9月10日から12月23日にかけて行なわれる同フェスティヴァルの一環として、主に学生を対象に様々なコミュニケーション／アウトリーチ・プログラムが展開される。私は、そのうち特に、舞台芸術の社会的環境に新たなエコノミーの可能性を模索すべく地域通貨の導入の是非を問う研究会をコーディネートする（http://www.anj.or.jp/）。

3）「リクリット・ティラバーニャ～すみだ川モード～」展：リクリット・ティラバーニャは、食をテーマに、人々の「日常」をアートの世界に持ち込む活動により、世界的に活躍するアーティスト。6月14日から7月14日にかけて、墨田区役所内すみだリバーサイドホール・ギャラリーで行なわれる同展では、「デモ・ステーション」なる仮設の舞台が設けられ、アート関係者や地域住民が自分たちの「日常」を披露する。私は、「ク

ッキング・ショー」を依頼された（http://www.asahi-artfes.net/）。

4）とかち国際現代アート展「デメーテル」：帯広競馬場や帯広市内を中心に開催される大規模な国際美術展（7月13日～9月23日）。蔡国強、インゴ・ギュンター、オノ・ヨーコら十数名のアーティストが参加。総合ディレクターであるP3 art and environmentの芹沢高志から協力依頼を受ける（http://www.demeter.jp/）。

5）川俣正「Cafe Talk」：東京藝術大学美術学部先端芸術表現科教授で、国際的に活躍するアーティスト川俣正が、国内外のアート関係者をゲストに行なっている連続トークシリーズ。私もゲストとして招かれている。実質的な運営は、様々な大学の学生が行なっているため、この授業としても協力できる可能性がある（http://www.ima.fa.geidai.ac.jp/cafetalk/）。

6）マインドスケープ：単なるガーデニングではなく、ランドスケープの発想を取り入れながら、植物との新たな共生を求めて活動するユニット。最近、メンバーの一人、大西瞳が、埼玉県鶴ヶ島で小学生たちとワークショップを行なった。鶴ヶ島の大地から粘土を掘り出し、植木鉢を作り、七輪で焼く。この世界で一つしかない鉢に、その土地に芽吹き始めた植物を植える。この、器作りと植物との共生の原点を見つめなおす試みを、是非われわれも実行してみたい（http://www.mindscape.jp）。

7）研究プロジェクト「インターキャンパスの創出による多文化共生の可能性」：文部科学省「学術フロンティア推進事業」である慶應義塾大学「超表象デジタル研究センター」の一環として、私が同プロジェクトの研究責任者を務めている。このプロジェクトは、現在の日本における大学の知の自閉的状況を打開するために、大学内の教育／研究と大学外での実践・体験をダイナミックに相互作用させる「インターキャンパス」の創出を目指す。同時に、そのインターキャンパスの活動を通して、多文化共生のための様々なプログラムを開発・展開していく

（http://www.hc.keio.ac.jp/faculty/shien-h/frontier/index.html）。

以上が、各チームで関わりうる学内外の企画である。とりあえずこのように、私の口から説明したのだが、この際、いっそうの現実感を持ってもらおうと、各企画の代表者・関係者を実際に授業に招き、改めて解説をしてもらうとともに、学生とのディスカッションを行なった。こうして、5月16日に、ASIASの田辺香保里とTIFの大久保聖子が、6月6日に、デメーテルの芹沢高志が、6月13日にマインドスケープの大西瞳がやってきた。

4．教室の外へ、「授業参観日」

6月末現在、ようやく本格的なチーム編成が終わり、それぞれが活動を開始したばかりである。よって、未だチームとしての目立った具体的な展開は見られないが、授業全体としてはこれまでに以下のような活動を行なった。

（5月30日）川俣正とのCafe Talk。東京藝術大学上野キャンパスにて、フィルムアート社編集長の津田広志とともに行なう。Cafe Talkの運営を務める学生、藝大の学生に混じり、当授業の学生たちも参加し、有意義な課外授業の時間となった（図1）。

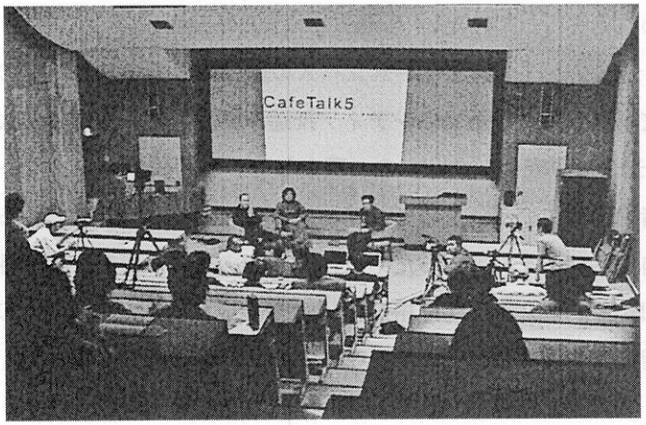

図1

（6月2日）日吉キャンパス「来往舎」見学。今後、特に上記「インターキャンパスの創出による多文化共生の可能性」プロジェクトとの関連から、この新研究棟の使用が十分考えられるために、施設・機器の見学を行なった。合わせて、学生の一人石本華江作・演出のパフォーマンス「衝　うずき」を鑑賞した。

（6月23日）旧千川小学校見学。ASIASを主催するNPO「芸術家と子どもたち」、そして東京国際芸術祭を主催するNPO「アートネットワーク・ジャパン」がオフィスを構える豊島区旧千川小学校を訪ねる。現在、この4月から廃校となった校舎を利用して、コミュニティ／アートセンター化構想が話し合われている。それに、本授業（特にオルタナティヴ・スペース・チーム）が何らかの関わりを持ちうることも十分考えられることから、現場を見学するとともに、今後の展開の可能性についてスタッフと討議した（図2・3）。

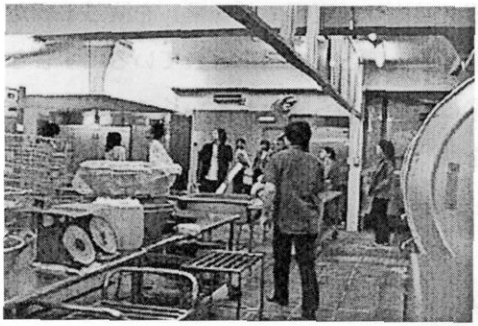

図2

図3

（6月30日）「くまくら先生の授業参観日」。これについては、少し詳しく語りたい。

前述のように、「リクリット・ティラバーニャ～すみだ川モード～」展（主催：アサヒビール芸術文化財団）の担当者から、私は自分の「日常」を披露すべく、何らかの催し物を行なうよう依頼されていた。そして、とりあえずは「クッキング・ショー」をやることになっていたが、私は、主に三つの理由から、それを回避したく思っていた。①これだけアート関係のイヴェントが多く、またすぐさま消費・忘却される東京という都市で、これ以上単発的な催しを（しかも自らの手で）行なうことに強い疑念を感じる。②ティラバーニャは、初期の活動においては、現場で自ら料理するなどして観客たちと新たなコミュニケーションの形を模索していたが、最近は国際的に「売れっ子」になったせいか、今回の展覧会でも自分が現場にいる代わりに、アート関係者や地域住民に自分たちの「日常」を披露させ、それを自らの「作品」と称している。つまり、現場で「日常」を演じる者たちは、端的にいって、彼の「作品」の一部として利用されているにすぎない、という見方も十分できる。③にもかかわらず、せっかくこのような機会が与えられたのだから、それを私個人の企画とするよりも、美学特殊の学生たちも関われるような形にしたい。

このような理由から、「クッキング・ショー」は早々に取りやめ、その代わり、美学特殊の授業として何か面白い企画はできないか、皆で考えることになった。都合四回のミーティングを通して、かなりの試行錯誤と紆余曲折を経て、ようやくこの授業そのものの「参観日」を行なうことに決まった。題して「くまくら先生の授業参観日」。通常、三田キャンパスで行なっている授業の一回分をそのまま展覧会場にもっていき、それを学生の家族や地域住民などに開放し、交流を図ろうとするものである。

当日は、私がまずこの授業の趣旨を紹介した後、前述の八つのチームの

うち「宗教的なもの」と「身体のエロス化」がそれぞれ1時間ほどの発表を行なった。合わせて、会場では、これまでの授業を収めたドキュメンタリー映像が流され、必要に応じてDJも入り、また学生たちお手製の軽食とアサヒビール提供のドリンクをサービスするカフェ・コーナーも設けられた。約60人の「参観者」があり、実際、学生の家族や通りがかりの地域住民らが発表に聞き入っていた（図4・5）。

図4

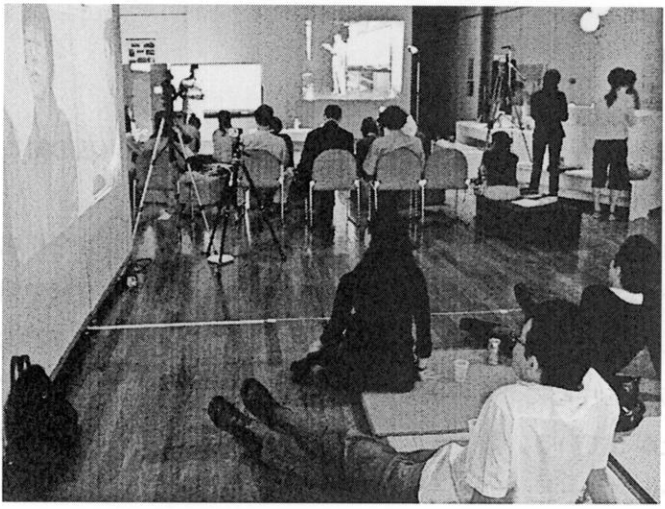

図5

この「参観日」の意味は様々にあったように思う。①まず、学生たちにとって貴重な「実践」「体験」の場になったということ。「アート・マネージメント」「アート・プロデュース」等の講義は大学でも行なわれているが、それを実践に移す機会まではなかなか与えられない。今回は、まことにささやかながら、そのような機会が与えられ、学生たちもそれぞれ「現場」での作業から多くのことを学んだにちがいない。②先に、単なる単発のイヴェントをやるだけでは、アーティストに利用されるがままになるだけだと書いたが、「授業参観日」は、われわれの授業の一部を通常のコンテクストから展覧会＝ギャラリーという別なコンテクストに移植することにより、ティラバーニャ展に「利用」されながらも、通常の授業ではなかなか実現が難しい、学生の家族や地域住民やその他一般の人々の参加を容易にした。③当日も告知したように、今回の「参観者」は、三田で行なわれている毎週の授業にも今後参加可能であり、そうして「外部」の「異質」な人々が加わることにより、授業そのものがいっそう活性化し多様化することが見込まれる。

5．今後の活動

まもなく（現在は7月初旬）春学期が終わるが、今後の活動は（私の知る限り）以下のとおりである。

春学期最終回（7月18日）までに、各チームは今後の活動プランを作成し全体に提示する。相談の上、修正すべきは修正し、夏期休暇から秋学期にかけてプランの実現に向けて作業を開始する。現在までのところ、①「小さいメディア」を中心に、この授業を一つのドキュメンタリー作品にする計画が持ち上がっている。②「オルタナティヴ」を中心に、旧千川小学校のコミュニティ／アート・センター化構想に具体的に参画する案が進行し

つつある。③東京国際芸術祭のコミュニケーション・プログラムの一つとして、「脱資本主義」チームと他大学の学生が協力し、地域通貨についての研究会が発足する。④「土」に関するワークショップを、マインドスケープのコーディネートのもと、明治大学農学部の学生たちと共同で試みる。⑤この「美学特殊」の授業全体を、「インターキャンパス」プロジェクトの一ケース・スタディと位置づけ、相互の有機的連関を図っていく。（⑥授業の副産物として、なんとフットサル・チームも編成されつつある！）

7月18日までに、各チームからどんな活動計画が提出されるか、待ち遠しい限りである。

6．インターキャンパス――「大学」と「世界」のエナクティブな産出に向けて

ピエール・ブルデューは、大学人の理性を「スコラ的理性」として批判している[4)]。school、école の語源である古代ギリシャ語の skholè は、もともと「余暇」を意味していた。現代の大学人は、今なおこの語源に忠実であるかのように、自らの思惟の「自律性」を保持し、囲い込むために、経済社会的条件を括弧にいれ、そこから自らを遊離させ、プラトンの説く如く「『マジメニアソブ』ことができる無重力の場所および時間」を享受している。この「すべての学術界の存立条件である」スコレーは、したがって、この世に生きることについての根源的「無知」により裏打ちされているとともに、「この無知を可能にする経済的社会的条件についての、いかにも得意げな無知を伴っている。」

こうして、大学的知の主体、なかんずく哲学に象徴される人文学的知の主体は、社会的に特権的で「無重力」な場に視座を設け、そこから、「生活」を捨象した抽象的な「世界」＝「客体」について一方的に認識し、知を生産してきた。彼らはほとんど常に、「知る」主体であり、「知られる」客体

になることはなかった。スコラ的理性は、この知における視線の不均衡にこそ基礎を置いていた。

このスコラ的理性が、決定的な限界を迎えている今こそ、知は、スコレーから出、「知る」のみならず、「知られる」体験へと自らを開くべきではないのか。「知る」と同時に「知られる」知＝体験となるべきではないのか。そのとき、「知る」知は、絶えず「知られる」体験となることにより相対化され、揺さぶられるとともに、「知られる」体験自体も自ら「知る」ことにより、さらに鮮明に深化していく。

フランシスコ・ヴァレラらが説く「身体としてある反省」もまた、同様の事態を指しているだろう[5)]。心の構造を科学する認知科学、なかんずく認知主義は、心の外部に特権的な知る主体を暗黙に措定することにより、心という客体をコンピューターに因んだ記号操作の集合としてみてきた。ヴァレラらによると、そこに決定的に欠けていたのは、知る心それ自体の「経験」である。したがって、これからの認知科学には、科学と経験の「循環性」こそ必要とされているのであり、そのような、西洋の知においては蔑ろにされていた「身体としてある反省」を古から開拓し実践してきた東洋の仏教、なかんずく三昧／覚思想をこそ、導入しなくてはならないだろう。

そのような方法を、彼らは「エナクティブ・アプローチ」(enactive approach)と呼ぶ。「認知が所与の心による所与の世界の表象ではなく、むしろ世界の存在体が演じる様々な行為の歴史に基づいて世界と心を行為から産出すること(enactment)とする、ますます高まる確信を強調するために、「エナクティブ」(enactive)という用語を提唱したい。」[6)]「知る」心／「知られる」世界がまず在って、そこに認知が生まれるのではない。逆に、「知る＝知られる」という行為が「心」と「世界」を産出するのだ。このような意味でのenactmentを、大学の知のあらゆる場に生起させること。もはや、「知る」大学／「知られる」世界ではなく、「知る＝知られる」行為体が、

そのような既存の「大学／世界」を脱構築しつつ、絶えず新たに「大学」と「世界」を産出・再分節していく。かくの如きenactiveな行為体こそが、先に学術フロンティアのプロジェクトとしてあげた「インターキャンパス」の謂なのであり、そのささやかな実験こそ、「美学特殊C」なのである。

註

1) 以下、大澤真幸「〈大学の知〉の現在」（『大航海』、第36号、2000年10月、47－57頁）から示唆を受けた。
2) 私はここで、「オタク」という語を非常に広い意味で、つまり（たとえば東浩紀が『動物化するポストモダン』〔講談社、2001年〕で使用しているように）日本の「ポストモダン的」主体の典型的在り方として使っている。
3) イマニュエル・ウォーラーステイン「二十一世紀の社会科学」、山下範久訳、『別冊　環②：大学革命』、藤原書店、2001年、44－56頁。
4) ピエール・ブルデュー「大学的知とは何か」、加藤晴久訳、同書、57－74頁。
5) フランシスコ・ヴァレラ他『身体化された心』、田中靖夫訳、工作舎、2001年。
6) 同書、31頁。

1992年に理工学部に就職して以来、戸張先生には、公私にわたり、本当にお世話になりました。懐かしい思い出も多々あります。理工学部は、学部･大学院と「変革」で激動し、私もまたその渦中にいましたが、それも含めこの10年間大過なく務めを果たすことができましたのも、戸張先生の暖かいお心遣いのおかげと感謝しております。
戸張先生のますますのご発展とご健康をお祈り申し上げます。